【 5 】

氏　名	齋　藤　久美子（さいとう　くみこ）
学位の種類	教育学博士
学位記番号	教　博　第 3 号
学位授与の日付	昭和 42 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 1 項該当
研究科・専攻	教育学研究科教育方法学専攻
学位論文題目	**「自我機能」と「現象的自己」の二つの枠組による人格適応の研究** **—ロールシャッハ法と自己評価法の統合的使用を試みる累積的研究—**
論文調査委員	（主査）教授 倉石精一　教授 相良惟一　教授 佐藤幸治

論文内容の要旨

本論文の目的は，人格適応を，「自我機能」及び「現象的自己」という二つの枠組から，統合的に研究することにある。「自我」は主体的な機能的過程，「自己」は意識的に客体化されたものとして区別し，「現象的自己」とは，自分自身の存在及び機能を意識的に客体化したものと定義される。

従来，人格適応に関する有力な心理学的理論は，精神分析学及び自己心理学によって提供されたが，前者は自我機能を重視し，後者は「自己」を重要と考える。本論文は綿密な歴史的展望により，この両者を統合する理論構成を試み，以下の見解に達する。「自己」は，自我機能の生物的・心理的・社会的発達過程を通じて形成されるが，それは「自我」の“できばえ”をそのまま反映するものであると共に，逆に自我機能に対する一つの重要な動因として働らく。すなわち「自我」はみずから主体的に機能しつつ，その機能を客体化するという二重の役割を果しているが，「自我」は，このようにして生成させた「自己」をみずからの“鏡映像”としてながめ，それ自体の機能をフイードバックするために用いる。「現象的自己」は自我機能の所産であると共に，自我機能のための不可欠な準拠枠及び動因となる。著者は「自我」と「自己」の両者の関連のもとに遂行される機能を，“適応的統合機能”と名付けたが，これは対象関係と精神内界への疎通関係とを単一化した，自由な自律的機能であり，生物・心理的個性を自他から容認された形で持続的に発現させてゆくものと説明する。

この適応的統合機能をよりよくする条件として，自己評価の正確さと客観性，内在化された社会的価値基準に照らしての是認にもとづく自己尊重と肯定的価値付け，及び「自我」の自律的諸機能全般の健全性をあげ，これらを指標として用いた実証的研究を試みる。現実に適応度を異にする三群（正常，神経症，分裂症）を設定し，適応的統合機能の評価を，各種の診断テストによって行なった。まず自己意識を質問紙によって診断する場合，神経症群は「現実的（認知された）自己」と「理想的自己」の評定値の大きな隔たりによって，他の二群と区別されるが，正常群と分裂症群との間では，この指標に関する明瞭な弁別はなしにくい。一方「自我」の自律機能の諸側面や全体的健全性を，投影法に属するロールシャッハ・テ

ストによって評価するとき，分裂症群は，明らかに自我機能の低下を示す諸指標により他の二群と区別されるが，神経症群は，正常群と分裂症群との中間値をとり，他の二群との弁別は必ずしも容易ではない。以上の診断法は一見矛盾するようであるが，これを相補的総合的に用いて，適応的統合機能の評価をするとき，現実的適応度に適合した妥当な診断が可能になることが見出された。正常群では，「自我機能」の健全性が「自己」の中に正確に反映され，そして又，「自己」は内在的価値基準により是認された肯定的価値付けを与えられている。これにより「自我」が「自己」を準拠枠として，適応的統合機能を最もよく働かせている。神経症群は，やや損われた自我機能を，正確に反映した「自己」像をもつが，この「自己」を容認できないことが，適応的統合機能のじゆうぶんな働きを阻害する条件になっている。分裂症群にあっては，不健全化した自我の諸機能が，「自己」として正確に客体化されず，遊離した「現象的自己像」が生じ，フィード・バックの機能を失なった状態と理解された。著者の試みた一連の実証的研究は，適応差の明瞭な，以上の三群ばかりでなく，境界領域に属する対象にも，「自我」「自己」両枠組に関するテストを総合的に使用することにより，その適応度の診断が可能であることが確かめられた。

論文審査の結果の要旨

本論文は教育臨床の分野の中心課題たる人格適応の問題を，「自我機能」及び「現象的自己」の二つの枠組から，統合的に解明しようとしたもので，理論的研究と実証的研究とから成っている。

まず自我機能に関しては，S. Freud の概念規定を基とし，それに精神分析学の各分派の理論をひろく参照して，総合的な独自の構想を発展させた。精神分析学では，無意識の機構を人格構造の基礎として重視し，投影法による臨床診断テストは，これに投影させて自我機能を診断しようとしているのである。他方，これと対照的に，意識化された自我機能である「現象的自己」を重視している自己心理学の立場もある。著者はこの両者を統合する人格モデルを設定し，これを適応的統合機能と名付けた。従来の諸学者の研究成果を丹念に整理し，それをたくましく総合した才能にはすぐれたものがあり，その構想には独創的な面が認められる。実証的研究において使用したテスト Barron の質問紙を普通のように自我測定としてでなく自己測定として見た点などに独創的な着眼があり，その他の評価法についても綿密な検討を加え，丹念な工夫により診断に役立つ総合的使用法を考案したことは，本論文における最も重要な成果である。理論的部門においても，さらに精細に掘り下げるべき余地はあるが，著者の独創的な着想と研究上の多大の努力は教育臨床の分野に人格適応に関する重要な知見を提供し，臨床診断に対する有用な提案を行なったものとみなされる。

よって本論文は教育学博士の学位論文としての価値があるものと認められる。